

# 1 とりあえずの〈こえことば〉

あんな立派な身体をしているのに細い声、もったいない、苦しく思えてしまう。ちゃんと出せばきつといい声なはずなのに。

また、いい声なんだけど、口の中でこもっていったよう分りにくい。

今、話をしたり、人の話すのを聞いたりしている時、とりあえずの声、とりあえずのことばを使っていると思われて、気になりませんか？

言葉はもっと思ったように言えるはずなんだ、自分の声も、もっと違うんだ。なんか、どこか違うなと思うときもある。十分とはいえないと感じる時もある。

何で言いたいことが相手に届かないんだろう？ 言う内容なのか、言い方なのか？

でも、これで間に合っているんだから、いいんじゃない。

それに、今まで、そんなこと習ったこともないし。

とりあえずのことばを何とかしようと思っている人はけっこういます。ところがこうした悩みを解決しようと思ってもおいそれとはできない。

テレビの、特に取材記者なんか、ぎごちない抑揚でニュースを読んでものを聞くと、気の毒になってしまいます。いや応なく、やらされて、ニュースなんだから、中身が伝わりさえすれば、とりあえずいいじゃないかというのでしょうか。

これは、それまで全く、〈こえことば〉の習練が、教育の中でやられてきていなかったからだと思います。

声を出すのなら音楽教育をやっているといわれるかもしれない。でも、いくら歌

がうまくてもしゃべるのを聞くとがっかりという人もいます。

話すのにも練習がいるようです。そして、書いたものを読むのも、また違った表現技法があるといえます。

言う事柄が大事で、その言い方まで手がまわらない、時間をかけられない。というのが大方の気持ちでしょう。

でも、人前で話しするのを大事にする人は、演説とまではいかななくても、ちょっとした話でも、念入りにリハーサルするといえます。

これは、とりあえずから脱却しようとする1つの小さな試みの記録です。

たまたま、こえことばのレッスンを知った岩佐玲子先生(英文学)が、自分の大学・恵泉女学園大学の、教職課程の講座の中に、このレッスンを取り入れようと思われました。それは、実社会に出る前に、こえことばに対する理解と表現力を身につけて、送り出したいと願ったからだと思います。

私の方も、俳優のせりふ、朗読の訓練の中で、あまりにも基礎的な感覚が養われていないのに驚き、早いうちに教えられていればいいのにと、思っていたところでした。自分が身に付けるだけでなく、教えられる人が育ってほしいと思ったので喜んでお受けしました。

実際に、レッスンをやり出してみても、与えられた時間では、ごく初歩的なことを身につけることまでは出来ても、教えられるまでになるには圧倒的に時間が足りないことに気がきました。

また、それまでは、何らかの必要性を自覚してレッスンにきた人を相手にしていたわけです。ところがここでは、必要性を分ってもらいながら、進めていかなければならなかったのです。ほとんどの人が、全くそれまでに、こうしたことに関心を持ったことさえなかったといっています。

さらに、朗読の表現という一般的な先入観があるようです。ともすれば、高低や強弱、遅速、間といった、外形的な抑揚を作ることだと思われるようです。それ

に加えて、作品の意味をよく汲み取ってという精神主義でカバーされています。あるいは、お手本を真似ると言う場合もあり、指導者の審美的な感覚によって恣意的に規範が作られる場合もあります。それによっても、1つの世界を創られるということはあると思います。

これらを全面的に否定するものではありません。これらは仕上げには必要なものかと思っています。

ところが、この、こえことばのレッスンでは、声が相手に届くとか、イメージを思い浮かべながら言いい、そこで生まれる表現のわずかなニュアンスを大事にする、とか、普通では気付かず見過ごしてしまうようなことを基礎としていきます。

これは内面の集中によって生まれるものであったりするので、壊れ易く、残りにくいものです。一回一回新しく作らなければとさえ言うくらいです。

そのためすぐ先入観に犯され、せつかく得たものの評価を自分で貶めて、積み重ねて習得したものを無に帰してしまう場合さえあります。

今でこそ、こうして整理できますが、手探りで、こうした条件に対応し、不備を調整し、思い違いを取り除いていって、ようやく、3年目。今回の受講生とは、予定した以上の成果をあげ、なにより、ほぼ全員が適確に受け止めたことを自覚してもらえたと思っています。

「こえことばのレッスン」は、演技訓練の一環として生まれたもので、こえことばの、表現の技法の1つです。

演劇ばかりでなく、人前で話したり、こえことばで表現したりする必要の多い人たちが、もっと活用できるものだと思っています。

『こえことばのレッスン1～3』（晩成書房）のテキスト本は、手にとって下さる方の要望に応えるところがあったのか、さいわい息長く版を重ねてきました。この中では、方法のみを簡単に述べているので、実際の運用となるとさまざまな問題が出てくると思います。

また、わたし自身も、異なる年齢の方々や、違う目的の方たちなど、さまざまなグループでレッスンを行なってきて、各項目のレッスンのポイントとなるところを

新たに幾つか気付かされてきました。

ここに、教職を目指す人たち、主として、恵泉女学園大学教職課程総合演習の2004年度受講者(日本文化学科在籍学生)とのレッスンの実際をレポートいたします。

このクラスでは、お互いに刺激し合いながら、一人ひとりのこえことばを身に付けて行く過程が、際立って個性的で特徴のあるものでした。

レッスンの様子の再現は、なかなか困難ですが、不十分ながら実践例を採録し、それと、具体的なカリキュラム、受講者の率直な感想・レポート、それに加えて、〈こえことば〉についての、私の現在の考えなどで構成してあります。

〈こえことば〉のレッスンを、実際に行なっていく場合の参考にしていただければと思います。

ほかに、特に、シーンや戯曲の舞台発表を行なった年度もあり、〈こえことば〉だけでなく、身体の表現を含めた、コミュニケーションのあり方を考えてもらいました。この演劇発表についても、レポートしておきたいと思います。

加えて、他のグループでの体験、気付かされたこと、考えを少し進められたこと、なども含めます。実際〈こえことば〉をコーチする場合、独習する場合の参考になればと思います。

今回、この本をまとめるに当たって、人前で言う過程を、詳細に跡付けたところ、**人前でしっかり言うことは、自己確立につながる**、という発見をしました。人前にいるというだけで自分を失ってしまい、落ち着かなくなったり、居丈高になったりして、言おうとする内容にそぐわない印象が生まれてしまいます。人前を、ただおおぜいと漠然と捉えるのではなく、一人ひとりに向き合い、ことばを相手に届けていくこうすることで、否応なく自分というものをしっかりさせて行くのです。

誰もが、ものを言う力をもっと持てるようにしたいと願っています。